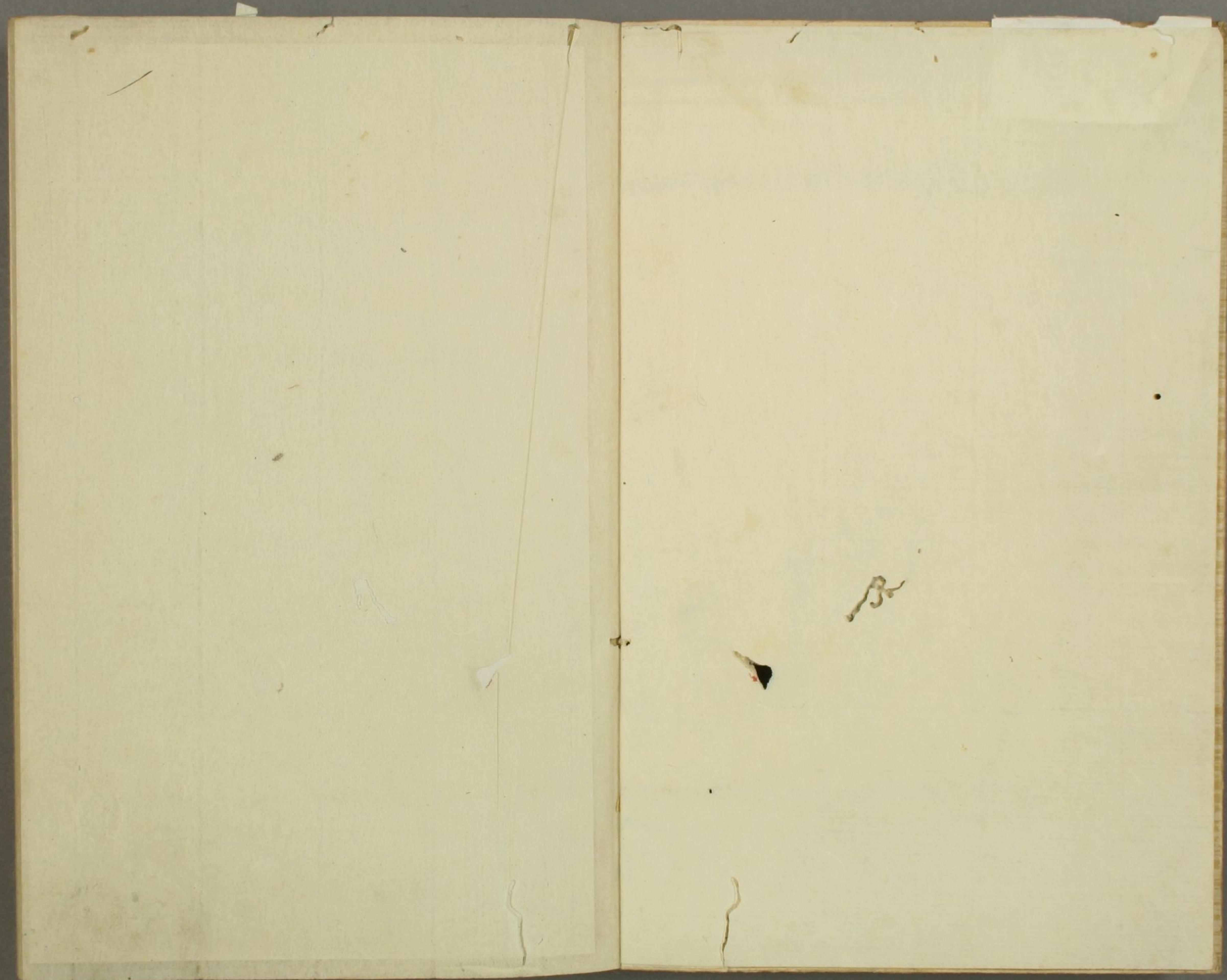




老人
語話

伊地知文庫
文庫20
439







伊地知氏書冊

老人雜語



老人は江村專存の徳字具業醫初か
後狂歌は(後)森他牧子事小(正)禄八年
光源院慶礼の年生也(寛文)元日没(海
百歳)

五山の大詩會と狂母切とと秘を南緯古信長
老の時狂母切の云あり(五山)堂者云と云(狂母)
切と狂母其後絶て無(余)今の式(五山)の長を
及西堂(寺)一(五山)漸と供(志)ふ(一)と(狂母)

云々あり出世の人各類一ツと書きて一坐と云ふ
回一可然とそ日の影も多くと云定て海を
類と上坐の聲も多と而して川公紙を度き
経冊と切て之物を面々の前も至に筆もに架
水筒もをくく而もは成て茶箱と一坐
の尻田一尺く後津書して坐心の文書も裁ん
而してみ岳より一人と出て吟みお心の竹書各津
こ法事一畢て大管あり此并西宮の原より
とて

抄り上人の祖と一画上人と云隆平東漢は法と
聞く歌学は猪也より是なり今も此て其法
流の者傳奇とせり昔或人二画上人と云て云
灌念佛をなす佛の通達能^{とる}の意あるを
通也とも是のこもて成佛不審と云上人和哥
を以答ふ

ちかたこふ雖も六階はま約の法の道なり
まやまむむりそ

是木のま一ちより春一を所りとて

多武軍の事、漢足入麻を討ちんと欲する時
帝といふは入て該合を是かよひ書を讀山と
云漢足を初て讀山程記と云讀とあ武と云
お近く又入麻を討て武知多と云武を武
武の事と云

老人少年の時洛中よ四書の事讀解る人せ
公家の中よ山科為知とてとてと部をと習い
る多子よあて本と人よ惜しとてとてとて
實は不知也

右の時より外家の道伯と云人論語と講義
惺富 相玉寺善光院の信 伯父宣首 生 孝父の 孝父の も老人と同く
あは漢唐よ出川

右の時より妙心寺の南化天竺寺の兼考名あり
あ攝家の統治の時、法華の家の人又其のより
下等の家の人こと、翻中例、親王家の人を
以副しある中法より、を方今、迎御殿一條
西親まを、を以副し、むる、此の上の、私に
折家のの、初官が将より、曆升る例に

玄臺の所人不知なる定家郷学の形撰細川
出舟求めど一時止む浪拾遺に其時才一の
習主今ハ凡そあり

宗祇ハ今より百四十年以前の人こそ阿舎の法
仕存せし者成菴と云ふあり老人ハ其成菴
子舎をしく連舟の式定りて成子成と云ふ宗祇
より此其以て有る句備々申辨す只言撰の私
小五しとそ 連歌師の以舟 昌休 船巳 昌休 船巳
昌巳 昌巳 船巳 昌隊 玄的 昌程

貫之自筆の古法記ハ連舟法の付物ありし
を定家如に写さる本連舟作の玄的不あり今ハ
加賀の形撰と云ふ定家の写本今今自らの筆
力よ写し末二三差あり其筆ハ自筆の如の大々
字の形も揃して未止し是ハ後世よ書之る玄
法を不知者其を法とせん為して誤し書り是
を以て人其ハ書之り自筆ハ定家の付物と云
て稀なりと云ふ今時流ハ自筆の如く貫
之ハ其流とて不持らる可也申シ定家の時

まごいせりり草のむらとて其の太
大園をして定家の本より其の太り今絶
にり定家の本を人なかりし小寺之
書法かよりる字根より今時の原物とい
たる扱ふありて定家の本に今か如きより小
修の糸よりとぞ

得長寺院に今の二十之間半小池を名羽院の
所造りあり其名羽ありけり蓮舟王
池は白河院の所造りあり新に體佛を安置

其今の二十之間半に増築拾芥抄ふもめこの大
佛の奇号に音廣とこ

二修の池の所不今の皇町の小池の町に池
所は應仁乱の比疑失し老人知少の時小池の跡
是より小池より窟涌出て四條に流れ今の自許
の所より西に流る小池の池より庭の石に跡あり大
杉ふもあまのあり二修の池は清くわさきを
造り清く二條の所不の十境の名あるも池
小池の所不に長の町に二條殿より轉丸寺

今の^を信^を通^をを易く地ふして移し小池の池を^を取
立て屋形を結構し小池より橋おをかく鳥丸
西ふ東の壁をかけ室所の東側の町ありて
町家の後ふも壁とかけし門は南面しは市
一成就して暫く長住して出て陽之後一勢を
陽を流ぬは陽成位の所ありて書字よて所即
位よりむむん^り一陽を流ぬ^り遷の時老人も
新在^り町中^の後よさし一^り信^を通^をの^り貫目
岩^を流^ぬも^りありし一^り信^を通^をの^り貫目

簡子の扱を忘る老人と同年よて十二文の時
こと初ま^り信^を通^をは^り信^を通^をの^り貫目
又ぬあ上系の時^り信^を通^をの^り貫目
室町^の信^を通^をの^り貫目
老人^の信^を通^をの^り貫目
故道^の信^を通^をの^り貫目
墓^の信^を通^をの^り貫目
より^の信^を通^をの^り貫目
信^を通^をの^り貫目

大同元年名護を以て下りて是松城と云
左夫也也且多糸其時下りてはと云はまきりり
て西自介も互にらまるとい

大同元年中はくと云成は時号松も立合上はと
をたて号松城とす時大同元年の口と号
一虎の皮の大巾袋を下けて格切りの中程は
立なうう刀物も能てけるも其まう立果
よより左美将軍をたなうう胸をたのてをり
けりとい

大同元年

或時大同元年騎て鳥居をを急向を新に家の
下女也人系たををたけててはたおを大同
る上よりたて云只今我の裡を能とま

大同元年中より能河の時徳也たおをたれは
出て海部一信もたけて入るも

大同全盛の時事一人のたはるもは是を
あす式法の哥の舎あを何の器をそ上板
みまを友たといのゆかよは付感たはるは

て退き生中(奇)を唱ふ皆友たつよものこ

蒲生は江川の士に傳ふ亦源頼の長に後代をよ
事へ又大石は小石に指さるる人の始に頼朝
石坂を十二万石と取れしを頼朝よりと出さし會
津百二十万石と領し大岡の時には討つた
多し源頼は江原一ヶ玉と傳へて大名に傳は
し滅されては石と取らるる源頼の子に傳へ
て大岡の時を~~なり~~者よ如く知り二萬石を
蒲生にを長らうし二萬石と領し決せんか

つみて大岡の時前よ侍て退きの時氏に若と思て
口と指してはれし事なりとぞ蒲生は石と取ら
源頼の長らうし時日世を領し氏にのみ頼朝
うして天性は源の人こそは俗間の小歌よ見世の
蒲生を友に陳とさく云や下代をくると云はは
人の事なり

赤松乱と云ふ昔光隆を殺さるる時の事始止
名と赤松と相違て昔光隆をよ出はさるる或時
庭あり枯らねありしと山名をて云あの春

松軒は探中さんと云方のおきて云ふ松さし
奇り字子連——口利き者なるは山十と云り
山名子あてこ是より汁中ありく松子善光
院西を裁といふ松宮公の二曾孫所別祐子
孫之満祐と云は半の首尾をふす一人の如
き云傳るこ

美濃の平八郎として伝まき武常の名ある者
信長の臣一人は松本一徹今の松本信成一人は
氏家ト金太大抵一人は伊賀守松本之孫孫田之也

美濃日局の父く時智日局守松本一人は生捕して
大略とわける伝

有るは山崎の信長の子の父と書くと率
て美濃に於て信長一徹と生じし遊はし波
証不取入てはししは是より一も此を
めりしはし遊はし美濃の國とあるを
書ふトキハレドノリグテモセヌ四ノ
レテヒトノニゾナルと云り信長の
子小義龍と云ありかよしと云る
才五人を

殺一父の指し出しをたて牛一父と合戦を山城
道子子と對陣して討死をさし給う子に親母と
云々極て疾人といひ子に母をさし給ふを奪ふ
也り

澁川にたてし國の城衆の長流にをたて候を
大名に大岡東田と政司の時長をとりんては
東田^取とてゆて大岡上陣を候にを候と不
和に成て合戦を一時長考のときとてをさし
思し解はの城は東照宮の方へは城をとり

て心替りときせく澁川に候へりし時
替りより取をとり候に海に開きて取を
とりしと候をたてし病中候有楽をやり
城に入り候上者多く入事と候を取を候に
日小東照宮をとり候に候に澁川にあり
しに候に味方と候し大岡の旨と又候に
と約して命とゆり候に余りある事とや思
い候に候にちよ入て後候あり候に候に
て死を候に候に天下の政司に人のいふにあ

栗田秀吉 藤川丹波 いたと 武骨 小島 好の名ありて
度々 関八州を以て 全戦を関八州の者
に 藤川と名を付けても 豊後 一 程より 一 末
至て 穀々の 祐之

本多 之也 信忠を起す 武骨の者 信忠 忠言の士
に 小島 豊後 小島 信忠 一 信忠 藤川 氏に 小島 氏に
藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川
氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に
おど として 川 奪は 奪は 奪は 奪は 奪は 奪は 奪は 奪は 奪は 奪は

を 嘉慈 子 思ひ 武骨 之也 藤川 氏に 小島 氏に 小島 氏に
を 詳す として 川 奪は 奪は 奪は 奪は 奪は 奪は 奪は 奪は 奪は 奪は
折 氏 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川
藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川
藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川
氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に
らん として 二人 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に 氏に
は 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川 藤川
小 其 子 孫 あり

二條の如く関ヶ原陣迄て形て違て

○ 隆を志す者人石佛よりて大井よりて
下より赤刃を内よりて人の笑ふよりて
源氏の人よりて多る時つりて下よりて
を内よりて中よりて

文和三年の比土江の御よりて空より
て散るよりて人皆禁軍
よ

善光院の時表の局と云女よりて波よりて

元仁の乱起して下強勅よりて未のまよりて
はを考へて物よりて

此は後方或當名は海軍よりて捕毎西よりて不
遊是津一日大臣容字よりて捕毎西よりて不
務の上よりて捕毎西よりて捕毎西よりて不
時能大人宣石氣世哉句通よりて捕毎西よりて不
不止

亦藤原の如く天性根懐人の春日局の父の如く
之信長も能く知る長生信長を討て取り不富士山

根剛三孫致未備不
信玄志作
脂頼

を翹て云門落如い是とも小芋と云ふと云ふと云ふ
門落如い元来稲藁一徹の長い智左衛門も同じ
日向守呼取て二百石と云ふ一徹書て信長と親し
日向守是より粟丹波へまゝ加増して二万石と云
ふと云ふ

長尾藤信の信長と滅亡被合正しく紙衣
一ツ小振持一ツそと山越え誠おの朝倉の神一傳
ふりありと云ふ

信長は兵衛守なり所へ塔入の時唐神の湯惟子法

形を大に添付て是より茶筌敷きて佳く山越書り家
老木國境を越えて其の格をへん膳を法一密ふ
お云ふは格の人よ七五三の式法をへん石都合ある
とて早使を以て一田舎家具の大なるおを用意
せよと云信長お就て東平正しく被て山城守
面を文書書き證き申しの七五三の式法と申す
は対山城守嘆して曰吾國は塔川出およりたりと
是を公に我子共をへんを保つるありあはれと信長
よ御事と云ふ思ふ

東照宮世傳を以て生田^{阿波}あほう末序より大岡云
阿波未て國と見え汝と中山道の先手と云付る
より一は時家康と同輩と云て國と見えし中
國郡をいつに経領したるよりも未だかりし
と云阿波をいつに経領したるよりも未だかりし
て中画き人の至る阿波を至く拓て云汝家
康(礼)は往て國をよりと云一長より巻末より云
事あり旅より石山迄と云て一裕二十を
きてと見えし生田を到てきてより大岡の仰

なり、東照宮も是れを以て書きたる故留田と
東照宮の先日の申に不ぬ是を求て石川伯耆
を以て御子作付しと云ぬに、生田のたぬ
と云い人又大に意欲ありて間無し、ゆれとも是も
又小田原陣中を以て礼を以てと云
志津^{生田}の時揚井たむる言名無比敷七本流すも
猶より早く病死する故より人知るも大岡の列傳
同版の事と大和細を願と云大和紀傳和泉三玉
小刻を志津^{生田}の合戦中川殿死の時見えし救は

首尾あり、大岡惣て法大名の中^まて身と程をか
りなりと定ふとて大細を教子に言ふして秀次の
子と宗子といひ大細和細てと云

長岡を藩云昔は関ヶ原の附引て退くも武者と
あて^返返しと云々れは即ち返てくむ細くられて江戸首
を取らむとんとせし不^不郎一名一人来て引のけて吾不
首とて取せたり危き目とて引たり足とて云々さび
引武者^ま必^必世^世と云々て引る者^まと云々とて
玄蕃云々の切ある者なり

関ヶ原の時薩摩藩の浦津名庫 今の名は社文川と云
浦が浦前

本多中書斗半兵衛アアて中書斗半兵衛と云
兵衛アア今あの所は武者と述へ所々あるまといて
返しと声と仰ぐ名庫を信じて返し洗炮の者不
撃せたりと云々手^手あくる中書斗半兵衛と云々て後
けりといふ

小田原陣の板大岡防衛と云うて定まらば
関ヶ原の戦地指しをり右將を定めて結んでい
ぬ地へ者^ま書きを^まる友と書けて^ま云々といふ^今
今

の事と云れと云そ細川城中より然と云者十三八九人大岡
時分は源に在り云
同きて云ゆ等思味云一吾天下とほやまく取
半理りて此地は蒲生に三所ありて一可至者か
一とてたら所と云

大岡心も群も少も吞るるやあき生質
然九如藤を以甲州一國を賜ひを江死して即
に上の子に二万石と丹羽五郎左衛門の十七万石
を賜ひ死して即ち上四万石をその子に賜
ふと蒲生を没すに金津の万石余を賜ひ四郎

左清ら事以は八十万石と云よ

山城の月山里と云ふと梅松と云坊主に預けらる形
小松と稱へ程もなき小松輩生へりて歎上ひ
大岡哭曰吾威光許たもあふんと云そより歎る
歎を實に他より求て歎を大岡九右の者よ云と
そや松輩歎とら半止させよ生さくるとのた
まふと云

志津嶽の軍大岡一代の勝手薙江の軍東照
一世の勝手大岡を討は草よ立て佐久右云善

中川津を衝と攻るとすき飯と喫せると侍をして
往く途中百姓を令して津をたがひて東照宮に津
川を二益保野懈江の津にあり給る由の旨を少
体浴して在りし浴衣を脱ぎて馬と出さ終り
跡にたひり者并侍方々に津川やりし舟より
上る軍兵も秘蔵の小性ありし舟舟に東照宮
の軍兵已にむく急ぎ舟中の精兵多く討つる
た色むらぶとて津に入城たもの事あり
已に去

大岡初御旗の討つ中よりと失ふ人より大岡を
よ因て人皆疑ふ因り大岡城下の民家より討つ
く同じ覺るをよと出さし鞠のしりて世に
執つて佐長の指しある討つに佐長感して神く
御旗とすふこと
東照宮大岡よりとつなきありし大岡八別をよ
之尤実なるよとすに常陸と佐井より上
野の佐野村が富饒の地大岡東照宮と東
小討して後佐野村をまると討つ討つを修理御旗

の者之上仰せよと修理を命じしに
河上属を以て其の事

大岡東邊を以て岡東と稱しては甲列と修義二
の如きを以て其の事
ありて即日浅野源正より甲陽に岡東のお
き一才一の要地

大岡も田系岡陣の地浦を飛渡ると全津は討
と云はれ大津の要地と旦上野より治色して
武蔵相模より津河より上野作野より一徹を傳

てがしむ御さざらんにあ

海河二國十八万石と申付或は捕らふ或は討
つ十人より年より多く人数をたぐはし或は常
に云ひあつ美東より申す所は人数を平いて
互に以て出で或は中よりものごとく大空
のりと呼あつて城とさすしめ

石田治平が捕大岡に存在の所柄と申すは其の
人と稱する事多く是れ治平石田恨ある者不
が大岡に他界の明年伏見より已に事終り早

石田の越へし其の伐亡んとして今晩の晩うと
云はしよるしと東照宗和議に入りて室小の先ッ
左あらんすよあぶどはアと得山よきし金て
國政と糸とせさせしとて途中と後して得
山よきを治ア得山よて二十万石領知を以て
アと伐果さんとせし後領加取把取福あり
雷の加取居る竹中丹治もは治アは東照宗の恩
を蒙りたる者し

其の宗和宗も尚宗の者として大徳位と侍る

申左衛門の流へ暇を乞ふ者阿連の朝宗や
中さんとしてその後を佩刀とて一任く先思ひ
かどむか又吾許へ来と申をせんとしておもぬ
さうさう一任地ははて又来うせんは地とて
あり者多かりしとて

石田宗長庚子の一事其時まぐ知る者あり
其をとり者か藤井氏も一人之是なり
東照宗宗持成討のため小園宗入を祭の時よ
肥後守連て留む石田のめし其公をんとす

東照宮不信して子孫を畏むるは故に法將を
從て法將を把牧一人國に賜る。

京指進封のたぬお後上大夫七人少名四十六人
上方市法代長子おてみ十二氏に江戸一日ほど
おて小山にまて上方より源をあり石田謙友
一日廿一味をとり東照宮の法將大上表より
云くもや何とて江戸に降して評定あり
上方市法代お各一人宛石出して畧を問答
答ふもやあふども上方府の中只福高在馬を

人前て云大因達そのやう表札を立のりし先
手を致さしと云法將は時ふ法同む在馬も云
ふり能はず福高云おしては吾心も此の如しと
云法代の尻一人も云おまもの介只井伊多郎
おしんでお先手いたしんと云評定では法將
皆云妻あ子質と有りて是り此の如き程一旦何
て降をといひしと云東照宮評定を法將討立て
上方へよる然れども東照宮の後降をいふぞ七月
事起りて九月にやうくあるは法將此京を

合戦有りしに初は法ア言利ありはは備前中細
之敵波鼻を以路兼ハ之敵に敗軍を
的智裁長対大岡山松の陣より海路次尾崎
の寺に入て法解して上り此は素衣白馬の心
其寺今も存ありと云

大岡と徳大石半仕をれは多るて答えて或は家蔵
或は社舞好に随て遊下大岡常は云よ此は存と
入るるるると口くせよののよ

大岡常は月と種ありは法を院誅む大岡云天

下系は勝るを主なり張る謀みせしと

肥後の天弟宮上士の誠と極程好む事あり時云よ出
て我りし討者一人も是一を南条ゲンタクを人出
し一各討たしと云わも案のやうにゲンタク出て我よ
と云

宇太城は小西行はさうに居ぬにゲンタクは小西の信
郎を三子石

陸山屋と云をり一馬二弦に附る振ありと云
たるは細川紙敷にまが守よあるに相は徳の亦と

ほそくし根法を以て石室をかじ上四方相
徳布に本國と京と江戸と三ヶ所を極む

めき坂本は城と築く時千浦と云者坂本より
かきこみあげふや雲の峯と云坂本と云を明智振
の勺は磯山はふいしげは牧村はつむぎの寺は
達ひ

小坂陣の時先手より勝ると云されしと云事
大岡を時伏えを利休、茶の會の利休より云
地より出て尻とまくりと云ひやりと云て出

よ出陣しりし

杉永重吉は新橋の町佐長討手よりつくと云事
ヶ條本と云て佐長と云事の外はと云破る事
日二丸と破る事、女氏と破る事、赤巻の首
と云事と云事、いゝあふんと云大岡云かくせま
佐長我と生さきと云事、いゝ我死しと云
事、朝のめくし安理と討破る首と云事、いゝと
佐長と破る佐長云是めあふと云事、危の首と
ありしと云事、あふ事、いゝと云事、上真と

野事とたふと道とをいふけが果して然る事
吾道と隱^系とぞとて流絶の業と火とをけけ自
持^系とぞと

大岡の茶田勝家と伝ふる何味と火うのひよと
ててそまき紙中よひき侍く勇隆とと酒ま
後家らそやとてされも九松の事とも何とも
思われざらく神速と女比の人の

堀左衛の家よ哭き西の武士と持持まらん不用
のあくと左衛の云早よまをよ然る處一人の家

よ長おいたなき物ぞと

大事のはとあんな命をと左衛のちをそりあり
家臣よ堀盛おとそ者も暗くも者も丹後よこ
左衛の死とら付跡目の事遅く之望お忍てりよ
左衛の多年の勲功あり後月をよまどが糸て此
縁をよどさんと云道よ近日よお事子ハ久を師
こ思ま

様

大岡万事不速に式時左衛盛助の能の字と志
大つと持とて大の字と地と書して云御初が

るの城のめぐりぐらゝ一とて又さる葉の軍中へまゐ
る下さるゝもつぎうら紙ふ書又いあき存
を置きてけしそもて性うとてまゐるとて

大岡茶田と村時柳太の田境より毛受膳和指
家より代て金の幣を執て或は大岡をうく廻
りていきあうやむとて人成を叫ひ備をつ
れと室上督致し毛受計はし一守田返して北社
一帰る

姉川の合戦は東照堂の勝事し信長胡念義宗と

新陣の時東照堂先陣とてよはれ長比してまふ
田舎者何とて決せしと東照堂固く誘はれ長
許を即時より門と後しと敵を破りゆは村に
長のおとをふ時宗履と携さぬよあつけありし
とて

信長甲斐の回廊と新陣の時まの葉の城とま
おこしと酒井左衛門討はれまゝに長比してま
又者のかとて何とて決せしと左衛門尉重の
て清いぞ即時より城とまゐるとて長比の討

東照宮の祭はく東照宮甲斐行法上地と云ふ
し由小町威勢獨盛今この官内ふこ

東照宮語方吃まらん小計して奉りて言ふ事（はま）
と云ふ言事（は）河初伊豫守と備中と又小言事（は）
物申内通く地事人出て意討を

信長と言と政々付る方宇治の牧の爲の故ま
町より西頻り河も居よりある程に信長と
水きいよ立て若の権宗修と本も鬼神と云ふ
しと云町より上流に馬武者河に打つる者も位

長云必権川河を岸へし他人よりしと云果
して然り候久方、早是と云て権川討を
とて断とをしして打入も大に掛河を岸に
上軍の事と信長より御飯をを討し候事
あつた先をさぶしと云は讀も河を岸に
突と好む者こと

大岡の時又者の名をきし刑部御堀監物（左三門）
松井佐渡（和後書）庄林軍人活抱とて頭腦を撃
接しし伊勢の嶺の如く政々討へ秀頼討入る

上格はあは南幸町をよまの持前の大なるあは
人取のあや川にまで浅と田に轉俗まらむ
あは出りの者履て奥の先よりくそ対福眼
の西宗は幸町を奪てたり履て奥の先より
多りとぞ伏見のそは橋をて東照子の筆
持てり者たる予て取て高幸和泉持かけり
西宗と同一

大岡氏所と分律を討ては出はを大岡地
中と問をしてさふあまをよく書し福の

^本と一書書てくまよ紙記を持来れと書あを
君臣のあまき百とて

大岡或村字花多西を能とておのよる
下りゆふ時と 東照堂下りて履を正ふは
岡手と以て肩をおさへて江川原は履を
あまき

氏以法士と答さる時さうと及と言書て凡
呂の火と被ま

松平勘四郎忠房の士に今の山崎を祖父の山崎

小瀬山城

頼田小牧は信長法の内小牧は東頼田西頼田
大岡の陣に山崎一帯を大津所小牧にまじ
し時大つ方の先手蒲生を浮細川誠中と敵と
お向ふ時頼田の東二里半に重源と云ふを
越中へ花澤を捨て逃くをい花澤は踏歩て敵
と推き大岡の東陣一帯をいへく又長瀬と云
は時大岡方池田格入頼田のふ大らと陣あり如
の東岩崎の~~山~~大隈所方母好助ゆつ大山

より頼田をいりしを格入頼田に逃き左
よまてて云吾人の命を幸ひて云河は八敷の中以
て焼討し妻子と居る程多し八敷より小牧ま
あへては岳よりしりし大岡を思振ふありし
とて許さば格入めり又性て固く後て云今の
計をよるうらひありし大岡許を格入めり
勝五郎共いおを格しし岩崎とて取れされ
三右衛門三河へ入程し先岩崎と討んとは格入頼田者
たれは諸次の子運啓きたるよとせんと云

ゆきて教をこめて性く大山長湫の百子長湫
猪八の謀漏て大法不意とすき、其後より長湫
まで猪八の毒と清を案内せられ、百子長湫
猪と比、三年作らたよせんと云、猪八長湫まで
夜まぬ、六時猪八の先子、己の長湫にわけて攻
破ると云、大法不意の軍略解りて、先陳二書を
同幣と信じて、本陣にわけてかく、安成寺日先
延して、畑中、腰かけ、清の法師、或者を突き、鬘を
猪八と、初らざる坊主首なりて、面目なりとて、又

進て子息勝五郎と、警報を其路へ、永井太直、
父未て死首と、やまくと、ぬて、後まて、功上ほると云
六時森武彦、猪八のハ、大山より南、あり、三河、入
四湫の城と、あるんと、ふを、わて、猪八と、お、さ、り、
急と、告、ぐ、れ、い、せ、世、を、く、少、上、介、上、長、湫、二、三、十、
は、き、い、ま、ど、し、て、教、と、ま、ぐ、し、て、討、死、を、氏、朱、田、ハ、彦
と、云、者、首、と、獲、り、が、持、て、中、招、持、を、う、り、取、て、ゆ、
去、る、者、と、云、る、事、と、知、ら、せ、れ、い、は、招、持、と、ん、が
たる者ありて、告げ、ま、ハ、長、湫、又、性、て、其、を、取、り、て

敵に逢討らと云猪入及死の坂榊系或ア大頂
智や左馬の川を渡り敵を討りて坂左馬の
向て討討らあつたてび士卒と討討を
少げ却く又并何と来来りては左馬の
中を討手と畏て退くも大岡は合戦の
よ今度の戦ひ我方揃り大勝云人討死
之と云そを獲るも数多一家康は自身
我に動ぶべとのうあつたて或云勝入討討
一人合戦して勝てぬ又取平とて士卒と
共い

はるぬく相討らさふ討也と云

家田の対半と大馬存お謀て云一、宮と少
守は二二重塚の働き成かて一、誰と云ん
居てちと云と云者一、大岡一討小破と云
事と畏と云也、時小菅治氏織田氏前で云
承上と云と云一、ちと中たてを討死
と云と云一、の云と云大岡警を此等治一
代の
大切と成と云

細川越中守 齋藤子 戦功を一度は長死去の

年甲斐國合戦に勝陣をばせりとして大つを獲
りてその一平一のこゝを

明智神の細川忠春は是の年高のあまを米田助九
郎とあしくりたりたれぬあまをこゝにば行去り
ぬ一室は丹波一石^{ヤナ}石^{ヤナ}を十百石と必領
とめぬあまを全く米田がわけしと是故よ山
斎と稱せし

信長はあまを命して西國討手^大の如城よ是を
是故よ斗智と名目よかくると云ふ託して丹

波より上洛を壬午六月二日之突に信長と裁先
為に出陣とを——大に陣を越て田の水白くらん
まより田の中よまにばあまよあまをよ云ぬ
智神のよりれを幸にあり五月愛宕よ登りて
連舟あり給巴あまのあまを連て人よ問て云ふ
能寺の地は深きと給巴中て云お籠るたるのよ
思ふまやと云ふとを

あまを飛心の小室宿を連きたる山よ城郭を搦
け心と周山と云自と周武王よ比一信長と殿

付しは是は謀互の宿志

筑前守は信長の手前者の松より上原屋の氣
質たぬ人より對して辭たすことせり明智は外極
の極より上原屋の人の如く極常よりやくま
或時筑前守の明智より松よりぬらぬ心は夜夢
法として謀互と企する皆云ぬらぬと明智答
曰やくにいもなき事なりと云やとて哭て止す事とぞ
言藤の役止せば京都と改きては法はあまら
るる二十里斗法は京都より居てある食已よあま

法軍法がうはる京都と去て程子就んと獨の友
をいふ法ははじよとありるなりと今京都とち
がして去るもの胃なるまじくはる食をい
をてのふ家破と食をんとはる食をいへるをい
云所の食はあり世ぬれをいへど又福をいへる
云市松たきのついのまたたきくたううりて又佐
其の中細をいへる謂て云今まは中細を極と云き自
今中細をいへるまじくはる日の所は法はあまら
部よりらる斗はと法ははとまじくはる

て衆人よりははとて教とまきごとくやせしむると云根
と取らばいざしく云々を減は天命こ

大岡の瀬（ササ）を造る持綱と云ふこといざは縄
張と云大つら下とゆては西津法ありしとに
水碓の造法と人見て白い短し書込にお魚
せむと云大つら室ふ衆天下とゆてこそ人の手
長く成ぞいざい向へ長くする理をいざい

信那が輔乱の対法同長のち認めと云人執る指
の指ささよ切養より女の衆なる衆とあけて見り

如女後長長衆の書い光衆と云老人泊り長衆
る伯父い長つて所謂とて云是は長衆の書也
是の及んかうは長衆の書い其をいぞい厚いぬ
たり長衆の衆の書い其志の書い其の書い
身の上あやうし人信云り其書改書す

衆照字記やんで陸上居る一時衆名に記して
並り上りいざ

大岡が衆たるまよとて感収は大名の衆病者あり
と云ふと云いし是は衆と云いし大名とて大名

是々中々云

清心所の形録云石大岡と言上―肥後守と
計取由は詳録に二十五万石斗

大岡の所は行多と云岡井は町守石外を十石
斗へ阪板甚内録云石石斗―大つ々上て上
してはて計り

云好一人の云傳々云母理を来く奉細川の石
細門を減して一家祭田を修理を来く光源院殿
此以来は石石を好内一人元とて好と云三人

の石あり云好日向と云も一人の石録八年

義輝と裁せ―は三人の元へ修理と昔一人好と
好作と云―とぞ石石需其云云好の石修理善の
乳あり

三人元と云不和をり後行長と属―れも修理長
後尾法の元氣習とて跡器を来く好は我牙安と

と思ふもや大和志其の昆沙門を言と好と孫一孫
及石石討子と城介ぬと云は好中人數少あり

と好は石石加好を云を好はと好と好と好中
の案石と好少き加智来と云と好と好と好と

開^りて採入^る遂^に母^を落^して其^を養^ふ秘^に伝^へる^の茄子
の榮^を壺^に平^に協^し珠^と云^ふを^も亦^に碎^りて其^を自^ら殺^す子
と^いハ^右京^右太^右板^右の^方へ^落し^る孔^もも^も路^次を^難玄^と
殺^さる^人質^の子^と採^りて^深反^を信^長の^方に^在
庶^子と^云ふ^松と^云ふ^おを^登て^後車^を大^路と^海
して^六條^河京^を講^を年^十三^に去^人と^同年^を
り^しと^ぞ

信^長の^時に^奇あ^と云^ふの^奇一^安と^云ふ^とあ^まて^あま^て
奇^あと^云ふ^あと^云ふ^小芋^をど^の内^に落^した^をお^もぬ^ら

と^云ふ^あと^云ふ^しと^云ふ^にせ^ぬの^もと^云ふ^とぞ^採箱^と
云^ふお^もぬ^ら採^りと^云ふ^のと^用ら^る採^りお^もぬ^ら大^板
の^採田^原の^初製^をそ

其^の採^りぬ^ら光^原院^殿の^弟と^南都^一葉^院の^弟
と^云ふ^とり^てお^もぬ^ら三^好と^光原^院殿^と水^原八^年ふ
採^りせ^しと^り一^葉院^殿た^げき^のい^て方^の大^名
と^採り^ぬれ^も承^りせ^ぬは^早と^信長^一言
入^りぬ^ら信^長を^おも^ぬら^とて^取て^取る^人と^て
同^年と^云ふ^と三^好と^信長^と付^て其^陽院^殿と^天下

の主と定めぬ玉ちよをて決ちりてて扱て又
改葬一悔まり信長に由ちよちよせし付し攝津の
池田田仔丹など云者ホ礼と申て陣指を信長
は身一悔まりては云好余兼元と河合と兵衛
者先又完り来て由ちよと改むをと由ちよ公
戦く云永禄十年の比く本國寺也と外郭と攻破
して教一寺も成れども初信長と接しりて伊丹
池田と来て云好兼元と討てして遂に昌山善兵衛
信長も申て早速退き来りては己に礼辭りては

をり快布由ちよもふましりてて室町武衛陣
と城と築て昌山とをてりて今の武衛陣東側
ハ石垣く西側ハ所居の家中之武士二甲一を
揃一よとの半々本國寺の宿坊と階江取て
家とせし信長ハ昌山ハを思あまし一徳よ此故
信長よりさき一味して信長と謀反を信長
にまき上りて陣と攻落を云方逃て宇治の牧
場等の地よこもれり教兼元ハ云方よ属する小城を
信長又逃退ぬ由と云破る云方逃て西よら

毛利を情く思ひ居る大岡の末代は情と云て出
られうろ方の末とて所願もいふのしるんと
思ひ孔しは終り二百石と云ててをる一の者
を好む所也

信長城を武清陣に築きし方と云て居て慶長
の陣あり老人も四才斗をて乳母に抱きて居
てその日信長は小鼓をたてしに長岡山舟を
人よニ又長一又斗をて程とて一番舞を
し時取りし門弁を登りし一の細をききし

事と云てしとて居たり其城の盗人の刃のあは
小口をどと抜るる事と居たり是れは其城とぬ
きと云し今の在りしと云わ

大岡は明智孫左の討に居る松の城にあり居ありは
後一は備前守宇左衛門尉の城にありは
備前守用と云て家老上岡野をありし者有也
る者大岡は一味一味ありといはくしと云
世に云はく是れあり備前守と云て備中守松の城にあり
云はくは城に毛利家の城を毛利の居城と居て居

ハリ水攻ムト云フ落城せんといふ時め智徳互
の半信を云うはれし初後子して大乃斗切後
して法華を仰ぐと云う大時茂子業て出て
獲切らうと云ふ智半信を仰ぐと云ふ大乃斗
知せり教方も少入りと云ふ非こ

修く隆興寺に長壽舟の表に麻田をどおふど
信長死去の頃大岡討つ降参して留守となりて
大津へ参りし内左衛門大津の城に居て礼を乞
隆興入道大津の城に参りて武及物語ありし

海解強の原（俗傳云ふは海
を多輪出ひん）を云ふよはま武逆の原
何とてわぬ一木の初々事よりばと云ふ人夢て後
より一より多んと云ふ大岡紀好事と隆興寺小
寺（おまの）の如入部のは一揆原と紀し掃子行はを
これに才上果たり強原原のきと云ふと云陸
奥古道号は道閑に清より石塔ありて尼崎の古工
て一日滅せしと云

土佐に運使氏の人若より乞しと追代をそ子孫
たり先祖頼朝の才と信長者希義と叙して云

此を有し者くをせし長等亦欲之親討滅し
七代と云ふ

大目介西国一の大名ありし周防の山口の博小
所紙を大明一書おとせしせて取寄り
今より承りてより山口本と大目本と云信子陶
氏あり陶はよ大目と取てのけ繁田のく大目
介子孫も激しして信長の時と云ふとと毛利
元就陶氏子本と滅して大名とある元就の父と
廣元と云は時といふ激し

河内河津と云者信長を義経と河津守といふ
事討伐さるる事なり義経一代の、うえにそ
子孫にもの時まてあり

丹波よ一色とてを取す信長と下と取ては
細川氏あり丹は二玉と云ふ一色と云は一と云
斎藤氏の月徳よあて片の本と云は二玉と云
信長死去のめり山崎法屋取と母ありて手解ふ
一と云は二玉と云ふ法屋取と云ふの姉婿と云
才子兼田堅如と云者刀を拵来て信て山崎右の

倭子金山齊種しんしんふ便あり、米田傍（川）
次で小るての松よ足そ口と蹴て取並を松を
たの倭子をく、空匠の間より齊種て板撃子刺て
かりしとぞ。

大岡より中山へ去語の対割粥をすめよし、室上誓
けりて料理人調てまふま大よ去て云々野よ、
白なきは、我カ割粥と合ん子と知て持来る料
理人、也是のむこし、云々室、持物（^{キタ}）と倭子人、
集りて畑の上よてキ、割粥とあせり、はよ路次

より中、たれ、大よ怒て云なく、おし、云て常の粥
と虫さし、何の子、あらし、我カよ、一粒、けぞ、
合す、公の事、たれ、も、左衛門の、ごり、う、中、
せぬ、もの、こ、して、怒、と、ま、し、と、ぞ。

福清、た、唐、の、お、前、主、計、志、持、と、獄、の、町、より、二百石
の、お、上、の、志、持、と、獄、の、お、前、主、計、の、お、中、大
方、云、お、石、お、下、た、唐、の、お、前、主、計、の、お、中、大
よ、て、お、石、お、前、主、計、の、お、中、大、
五十万石、お、前、主、計、の、お、中、大、
罪、よ、

て口服差とてしては効率家して居るし
限出て言々もあふ、大岡寺のくも、実、是、
故、是、其、他、に、指、し、り

難波の波小冬陣、大岩、白浪と分ち下さ
如、其、仙、其、を、薩、戸、を、と、い、別、て、の、大、名、を、れ、か

台徳院殿より白浪なる牧、東照宮より武
百枚分てありぬり、り、森、比、が、亦、の、大、名、ま、
沙、る、故、と、る、ぬ、合、て、ら、る、ぬ、下、さ、る、池、石、に、そ、白
邸、り、上、京、の、町、人、より、信、り、浪、と、傍、也、と、る、人、
の

感、じ、ら、る、事、と、し

信、云、方、より、昌、正、誘、て、作、を、こ、え、来、む、こ、き、こ、ん、こ、
は、は、た、め、あ、ら、う、な、ん、今、は、か、と、一、味、一、改、こ、か
は、は、あ、措、せ、し、の、ん、と、云、昌、正、の、人、に、語、り、て
諺、を、と、昌、正、の、人、數、も、寡、き、よ、と、り、京、の、口、を、
所、人、と、居、き、し、て、ち、と、し、今、の、東、洞、院、事、例
ハ、好、し、今、出、門、は、も、今、の、お、り、西、に、あり、信、云、
は、は、と、し、ゆ、き、あ、ら、ま、さ、び、上、海、を、信、海、に、並、よ、
せ、ま、智、恵、院、に、陳、と、こ、り、を、は、る、と、し、焼、掛、也

へり其内より陣より自統せりて京の町之
条より上の方焼く所人おもまどり居て
あつ居る雄中にをんと云はし妻子女も引越
て居る所京の城もをだつ城よりちり發く
又一し又あつひよめて宇治の牧場の小城
流れて居るし又津奈で信長取け攻居る
公方の西より流れて毛利とたのし居る居る
此時信長は早よ居るし一にむあ七の城を
さして城条の朝条と攻て一門と攻滅し柴田と

城ありしと(玉其母)東より信長西より大坂の城
小本願寺の祇園のこま居り右方のとて城を
中の外若方一年よあつし大坂のせと
しこれとも増方多くみし紀伊の地は多く播
磨ある所度々加勢し居る居るし一極く
つらつら居る城を居るし一これ又つ路の
子今同心せび又も不和居り一年を居り
これより居る居る居る居るの加勢居る居る
又一年計居る又あつひよ居る城を居る

大分 東照宮に信松の由を以て信長の方より夜に
政書ありて難義ありしと信長相違多かりしより
て別条ありて強はるる宮止と云ふ事あり
東照宮と在る信長は西を武時友人因らるる
上京ありて方々之物を京より大坂和泉へ
往く堺の西に内子明智深及して信長と裁を
是より西人浮幣比と紙一本玉一海宮止と路次
より一揆殺せりと云又云東照宮の由為と云
さて強はるるやと云く東照宮の由子今甲州

ハ川尻を信長と云ふの由多かりし事東照宮討滅
して取まらり甲州の平亮信長の子の代に七ひ
信長と政つけと云天目山にて自殺を森武義
吉本代り美濃の合山と云はと七方石所録を
信長の討信長の川中野と云上流へるもなく
一揆を討つ山も野も皆敵の人質五十人と云ふ
云々、討拵けて各地へ攻る事代末の政名に
て路傍の碑と云はと来りしをこの道の邊に
念かりけし人質五十人と云て武義も是く

心算のせしむるに

阿井振津より大岡の時の代名に所領を石成り大岡に振津も勘定と云ふ事と云ふに大岡に渡り解工をけり先勘定世用へ進んでぬ事ト云ふの事なり

氏直と初談とお侍り申候へ也氏直云ふに訪御座よりあるに美石の領地氏直、領地を叶ぬ所へはとほさぬ上洛せんと云大岡と云との事、諸臣同公せば大岡云ハ一万石の地を

惜み諸家とを至の合戦に苦む事、所領之をとなへて好上洛せむ異言あり、其時軍と云ん士卒の力信をべしと云果して然り

福高九馬の表臣に名なき者多し、福高丹波後紀伊村上三屋右衛門大清玄菟之浦田所可児也茲上月大橋を村をといふ小姓を、當時は波ホり數は不入

飛出のほ大坂に遊池半あり、一生勘定日數へこれハ大岡見ゆつて地ホり勘定をうづり、波定

て杖ホホリ利と降させどとあらし波ホッたてする
室も亦あやある室と同一哉用事ありて解
んは誰いむといふん早く事と終よと室よ

信長の時、禁中の殿ありし事、急出民屋こ
とあらし波ホホリ地をどいなく作の垣は改なりと終
付うろ移入老人思事の時、おひは流て縁を
ちをと移やし被うろ屋をた子印あけてて其の
人もなき作に信長をりなど作はしと送地を
奇進するしあまのし禁中の居をしよくぬらう

因に信長と臣の家致するてさなもささめら
禁中に信長の時より無信をといふも大因の神め
とこいふが堀こい送間殿は奇の舎をとりあふ
三方の意をあくをまきしころくとさる赤小
豆餅をのせりあきしころ然しも奇に今う附の
人よ十倍と

常程寺殿と云ふ家も目んとをむらんあり
媒介の人云入進たれは其家もあまの初らしきと
の玉上若しとてそとて具してあまのうり波人も

云の紫衣の事々々しと曰ひしに帷子もきて
帳帳と申すまきて遊遊と申すは長の時々に
親世まゝ宗宗孫々宗宗子々保生を
まう子と申す子といふ申すと云ふ宗宗三郎子
之宗宗も三郎子 素照も宗宗も申すは
之何ぞ死す今よきて親世の家両家のたま
とありはれに本國寺石橋五度の大徳をい
初度宗宗後度いふ申すたまは是は百年計
いふの子に昭少正帝大徳いふあはる言は出づ
小正帝一の宗子と地地宗宗と云ふをいふ二日の徳
は法皇と二夜芝居いふ不登しとれは宗宗
させしり

樋のいふ大徳の上手津のふより来て京より
時のきくらひはるいふはらうははく梅口の徳
いふ人もなまはるいふ井了雲うねよ不井はら
と云ふのも新立家所は居波亭とて拍子あ
りて梅は拍子とていふやうに是は拍子とていふ雲
いふ梅は梅口の大徳の法皇とて申すをいふ拍子二

爲るて赤の笛二増之極口一増より老候いど
一増はふしと云一増を時玉人こしと
一増はふしの者より傷中座し云のく一増系来
てより牛尾をい云笛吹も吾と入しと云は笛は
彦三博市也云笛の上手云しと
糸恒元二と云敬者名云一敬世又糸恒をい
先少輩の成成をいし四いみ二糸恒糸恒打
ころり多一糸恒は子恒り子子て胃也二敬
は指さざれともおと初らるる比を

小以序には長の時ふま上手くと云は長の時のは
少以より暖子よ少以と云るは是は振の上手よ
て少以よりおとる句いと云はは大油ちとんと
能ありて端さよ僕よ殺さぬる指する胃也
そ分よ了空と云あり此は是存生を是は脈
下手に

大問内表その根あとの事とを以て謡といへ
以知村高野詣をい云るは高野詣は大阪の
西雲出て久しと云は是の西吊やと云るは

六回と 平忠文と加賀大納言殿と二人住ても
五名利器を敬と打止しるるを明智討めぬ
よめりいせいの山崎をたうー 古来の号松と

大納言道智と平忠文の家より南都より居る
三ハ東四院より仰承と居る道智ハ大教の上より
居るハ少教の上より物子道智より居るハ少教ハ今
の上よりと皆人より道智より居る年ハ二十斗
と下をれハ居るハ大教と仰承より居るものハ今も多
しと居るハ子ハ平忠文平忠文の姉の子ハ源重

ハ平忠文ハ平世を源重の教ハ大教宗院全くと
立より宗院ハ平忠文と今ハ平忠文の父ハ伊勢
の侍の者ハ平忠文の母ハ大教と仰承より居るハ
平忠文と仰承より居るハ大教余りハ平忠文の父
ハ平忠文ハ平忠文の父ハ平忠文の父ハ平忠文

法善乱と云ハ百二十年斗ツおの事ハ老人の
父既古なり二三文の比ハ少くハ日蓮宗より
れて京中より寺と多くハありハるハ平忠文より居る
追放せんとハ法善宗と平忠文と平忠文と平忠文

人の新を承の者よは壽宗の只那多一公裁の
討死したる人数多しを人の介方程も討死
しつゝは討ひる方承深し上野守故に放
つる事あり

右方大智院殿の比河波も右方ありて京と
あふ方の極之河波の右方軍と奪して京の右方
を攻むの節討死して河波へゆりしを人あり
年の比は俗の流し河波度の上りつゝ極多し
と云り出き比の半の極多しと云り

老人が年の時流中少老の存るべき老程多しよあ
らあり初めや朱公祖介の由緒も秘義を令し
田知へし

大義及び智及をた入し老の子にた入る事
乃達る才に及を宮増る才にしと及入同
ふよ多くして宮増る事と権政の事とある
宮増の事を権の政と云ふの才子に

右方息孫院殿の事とせむしとて流るして世に
かゝ年の時

信尾彦三郎の「慈照院殿の古事」に書かれた書
法は飯尾より出ると傳説も好く証す。弘治京
をく脱したるとある。何れも一都ハ世を
の夕夕云雀あつくとてても落し海よ（忘れた記）
言舞の役は大同北前那獲全に法守もか
法正言舞へはく脱はく薩守との境に伝布
と云城より年未切をたす」と云ふのよむせ
ては城をたす一むし何とあらうとも舞へは
そ終る薩守地より一揆登り伝布の城と取

一揆の大方は梅小文丸の「米卿書」に云者
伝布の城の備を布井上江一節江井善左衛門
云者にたごりて一揆の大方を討取城と云
右下下女羽の切名は一揆の大同の言舞の
もやこる社のるに井上江井の介の張
感状あり井上江一節に脱は度ありて
石に脱は没落以後善止大衆より脱居る
長くそ子より脱居ると云ふを以て一
奄々孫ありと云井上江井切と感して大同

茶と金とと字ふとも成さして止まらざる

世上金派は山より多し一昨年半葉を

台治院殿の時作り易くし所持の雲山と云

茶入を合衆茶共合百庄よりじ 台治院殿

づらして其價を五とんと字ふ所より合三十庄

ハ五と七十庄不足と云今之世と云お遠き

南都東大寺の茶切の形合を多と云の進

せんといふれ多と云と云年早きを調はる

しと云と東澄まんと云

新の葉と日本人よりいふるより其初良方あり

州智深氏の所家老より知るに清平より初を

西のまとはる如くなり葉心より望中茶を

西玉の方へ移くと思へハ世々京の力成者を

推さぬ人皆ふ富を桂川を海へ初てふを

なひ未明の信長の清茶を中継す 今の葉屋の家
西河徳久三茶二下

小推奇と信長より成るより火と切けり京

中より何事とも知るに新茶を那ハ池のわりの

茶のよめきあぞの好りて古石とのき本戸を

林の内にと石より上りて見るもの、妙智庵の隣及
ちとんと推量して云々のと云う、**紺色**の内志
られども、何れも何れも、**何れ**の事ありし人の云々
制も、**留**れ、思ひ合せ、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**
と火と、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**
奇の事、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**
の中、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**
妙智庵の事、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**
とた、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**

小石より、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**
の湯光、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**
度、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**
二の門より、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**
原て、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**
舞、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**
ハ、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**
中、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**
と、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**と云、**何れ**

おもひの心記だ
頁

足布之々々も折出て諸士も入られし其時
顔色変へて赤海色なるは皆衆も切あ白磨く
言氣揚ふるは皆新赤く都く変へたるもの
討死を言ふ手折ふるもの其は皆捨るごとく
弁をぬくごとくさそふ新可成は富所の言ふ一々
所家の五々の楽人の家あり強と云成て
楽人の家入りおむ衆と云ふし島田とあり
て出ッ奇手云成くと切より銀也はあり
所人よがりも強ぬ衆云いしよと云は安土

取が事んしとてその日の手あより赤く折る
幣角の幣と江と土岡山と云々焼落したる故ふ
其日安土と遠為とて幣と扱ふをぬくあり
て安土と取婚在馬介より人敷三千程流て安土
跡一明智七日は安土より海へ安土と云る所
佐世の老女と云は蒲生より一杖の中より胃女在
よ引か上て花々るとそ佐助智安土より海の時
大和の國を冒井野安土と云許なく思ひ安土
也はより安土大和路と云と向ふ初渡り成る

六ヶ五ヶ山脈をよき一明智子と名子よき約束
よき陣とよき好時明智より好連へ大和巴よ和
浅きをり河の畔まで引水うると云状素りよき
明智大和路より引水下多舟よ陣と取す内
東陸大岡も明智よも引して懸へ好子大岡
つんずよ住て西由よ有る上りて下舟好明
智の陣名よよきて河あちよよとつてよ
上流よ乃よよまよと云これよ明智あよよ、よ秋
雨のよきりよ陣多よ小桂川よと云理よ紙よ多よ

鉄炮の玉よ米よぬきて用よにぎりよと云、懸るは
よ在や大岡の先陣池田勝入言よ山太道中川津馬
三沢山四寄宝ちのよと云控車より明智よと云教
よ小沢徳よ明智よと云と云よと云青龍ちの陣よ梅
花よと云五ヶを攻めよ其夜よむよと云東河
多よが山科陣よと云西河よ報よる西河よと云北河
やよ日よと云死よるよ河也よと云大岡よ明智
取水の原よ上り西よ心河津よ日よと云見れ
よと云よ大岡よ陣後よ

大岡の時より茶倉の名物に菊水の茶倉とて菊
と水と紋をけくる茶倉あり口廣く五寸一寸斗
のこりたる程に蓋に茶葉の程を打きせ蓋に
藩生の茶を五一おとぎ公うら方かきあり
大海堂と云ふ言ハ敷少より出たり大海堂と云
字と云言の程に横に波つけたり丁二角の茶上ハ
威を是も口廣く

後系極更の書五丁の程に有申殿の茶紙に九條
反に今も傳はまじり権井出の銘に世言ち伊勢の
まろの御茶葉より作理より二代の作理の節
御より茶葉ととて

大岡江州小の郡より生る時か茶を茶葉と云人
信正の大岡に云りて我々姫一人五信正の茶葉と
置て飯くつせて給はまると云大岡又あひてか
こくアちちとて五石と云茶を二石と云茶を
七石と云茶を三石と云又茶を七石と云茶を
と云ふ

氏卿も日卿も二石と云の茶上ハ大岡仔細の松

坂を十有百ならず、後金肆を而余百ならず

氏江の上智の者、氏江に問て云、大岡に飯岡白飯、
馬をつあつんやと、氏江答て云、滅悪人は從ふ者
誰、何とんと云、又問て云、天下のまはらん者、誰
そと答云、如賀又左衛門のこと、又問て云、又左衛門は
を將どいめんと答云、又左衛門の將どは、我將どと
東照宮の事を問は、是は天下を將どき、人よ御
人よ知りてさよなる、是等存一、又左衛門の一人が
増ふよるてさる、物き水に取まき、い人こと云り

如賀大細言殿秀頼のよりよつきて、大坂に居るは
人よまし、あれは、東照宮に相いさる子成程
或時、東照宮と害をら、法合をよし、此後書同
公が、其は如賀、体甚あれと、さめて、東照宮
大坂へ入る、是より、天下、東照宮に属は

如賀、法正の先手の大坂、森本、後美、丑子名、
林、丑子名、飯田、丑子名、清、丑子名、石、丑子名、
飯田、丑子名、宅、丑子名、法、丑子名、正、丑子名、
なり、丑子名、行、丑子名、評、丑子名、美、丑子名、
又者、丑子名、た、丑子名、り、丑子名、る、丑子名、武

五言也

曾誰と云し時流のゆ飯田角屋之言藤とて
天下の人数を引とてくるは古今は是ことと云者
村又右馬と云者も信のゆ或骨の者く
不田と成云は人なる妻なるおとつひあは
せて跡まづびのこまはひつひして信談
まらひ悪人し
茶入言をさうするも近來の事老人が年の
以ハ世上の事一て名物と云ハ玉串と云ハ茶入と
利休の田舎角屋と斗ハ是も何れと云る事も

きくは茶の名称の極まらざるはお玉串と云ハ
名とも相玉串と云屋の角屋と古田織物茶合
十一段は求むるは茶の初ハ種もきく如茶一茶
而もさうするは織ア治アと百悪まぬ勘定を
其のれて茶室のにめようもましく道徳教
浄坊と云て代金を持ち来りしとき老人ハ
織アもよお合せさう茶合さう段と蓮花玉の
茶合一つは茶の世ハ一方より茶室の世ハ田舎
角屋ハ今江戸はありし下町の火は夜失はると

日能肩湯ハ口押の唯公大文字屋より取りあふ
時老人を呼ては榮入黄令をみせぬようむるむき
駒曲まお味悪きころむるやとみ五十せをたてて
四十五ねまありたる原作原をどふゆふあふむき
いもころこいゆふよ神よ入まてまては尺せよと
のむよんせむれども他お油ひぬるよ固て首
尾せよと遊よ木又まをる手よあつ

小舎の色紙元来仔細のむゆ不物を屏風一
羽よるね押てましと宗祇の舟子宗長出羽
下りし時一羽たよ國司をよ宗長許退して一夏
をゆめ一夏と突く一隻ハ踏みかきおみ子焼失せ
一夏遠てせし傳よせれとも二十ね斗まう紅馬
天の京の歌ハ空を津の舟とをまをく一羽お
まよとあり

利休子道あ茶の舎よ老人あ三年程つとて
舎を空の一羽と云を入まををたて終よ一夏
も城おの叫りいふるやなかりき今時政を程
つと承を空と年ふハ公入格別のもうこそ鶴

一考、今より家ありとて

大岡の臣は遠田を八として武勇才一の人五或村
大岡吾の所去り升は筆に昔と今とやとと
臣は臣あり皆曰之信の信と大岡を云
十倍をんと竹中半之指留云云矢昔は省
まうと大岡を云とて何とてかく云と云
答て曰大岡を八死して以来まゝお力と云の
に身は大岡歎息して詳は母り云云と云
字は花多ぬの事一を来満おの士に浦上と云者

傷最良此女玉のまに字は花多家浦上の家
はに重家悪性の者として西郡と持る人と縁
者おまゝ後と殺して存せざるを度くする
志に浦上と殺して終は傷を此女玉のま
とたは八師殿は重家の子に大岡と同よくある
るは大岡傷中なる松の如く攻めし時お智る反
逆の事と昔来り引ねなと思ひぬた自由
に存すばは時よ八師殿一味して力と流る
まよりて之松の陣まは振切をまきほくして

上京に其志よりて乃よく^{なり}年よ取のよ
息女たりて^{たれ}い^い田^田親^親あり^{たり} ^{かみ} ^大 ^同 ^名 ^四 ^と ^名
子よりて八郎ぬと^い言^ひ ^い ^ひ ^時 ^い ^い ^ハ ^郎 ^ぬ
まぶ^十 ^七 ^斗 ^に ^重 ^光 ^も ^存 ^生 ^る ^り ^し ^ら ^ん ^疾 ^毒
よりて人お成り^軽 ^き ^に ^困 ^り ^ハ ^郎 ^ぬ ^と ^由 ^こ
ふ^も ^五 ^万 ^石 ^三 ^万 ^石 ^不 ^飲 ^む ^が ^所 ^在 ^五 ^十 ^七 ^斗 ^に ^依 ^り ^て ^法
合して^言 ^ぬ ^の ^言 ^し ^切 ^り ^き ^く ^り ^ハ ^郎 ^ぬ ^大
同の^言 ^し ^ぬ ^は ^官 ^位 ^上 ^昇 ^り ^て ^在 ^る ^中 ^納
才^殿 ^と ^名 ^治 ^ア ^が ^補 ^礼 ^ま ^て ^治 ^り ^二 ^方 ^多 ^る ^也 ^と

東照文の^正 ^利 ^進 ^と ^名 ^を ^な ^り ^ハ ^大 ^守 ^進 ^を ^な ^り
今^上 ^に ^ぬ ^け ^の ^也 ^と ^言 ^へ ^奉 ^享 ^の ^年 ^老 ^人 ^九 ^十 ^九 ^七 ^上 ^の
お^終 ^へ

今^昔 ^中 ^納 ^を ^ぬ ^ハ ^政 ^所 ^殿 ^の ^姫 ^ハ ^政 ^所 ^ぬ ^也 ^也
乃^ハ ^大 ^同 ^を ^志 ^す ^も ^し ^も ^希 ^な ^り ^ぬ ^に ^あ ^る ^事 ^な ^ら
ことしも^誰 ^か ^一 ^玉 ^と ^名 ^を ^し ^北 ^條 ^が ^中 ^納 ^を ^な ^り ^云
治^が ^う ^礼 ^ま ^て ^二 ^心 ^を ^く ^使 ^見 ^の ^辨 ^と ^取 ^落 ^を ^使 ^見
の^也 ^と ^言 ^へ ^時 ^東 ^照 ^文 ^の ^持 ^し ^る ^名 ^も ^本 ^原 ^也 ^と ^言 ^ふ ^也
名^を ^治 ^す ^事 ^を ^な ^り ^時 ^東 ^照 ^文 ^の ^持 ^し ^る ^名 ^も ^本 ^原 ^也 ^と ^言 ^ふ ^也
名^を ^治 ^す ^事 ^を ^な ^り ^時 ^東 ^照 ^文 ^の ^持 ^し ^る ^名 ^も ^本 ^原 ^也 ^と ^言 ^ふ ^也
名^を ^治 ^す ^事 ^を ^な ^り ^時 ^東 ^照 ^文 ^の ^持 ^し ^る ^名 ^も ^本 ^原 ^也 ^と ^言 ^ふ ^也
名^を ^治 ^す ^事 ^を ^な ^り ^時 ^東 ^照 ^文 ^の ^持 ^し ^る ^名 ^も ^本 ^原 ^也 ^と ^言 ^ふ ^也

拔擢の崇禎、まきと思われ、つらつら、治がその
形、ちきつと見て、心替を治が、礼、固、京、ら
東照宮、上属、治がと、珍滅、した、忠、上、りて
佐、方、員、に、ま、ま、と、字、を、多、度、の、如、き、さ、れ、る、に
治、が、あ、ら、う、ゆ、に、長、嘯、の、中、に、あ、を、翻、く、子、を、ま、き
あ、り、祿、ま、ま、を、中、下、右、妻、の、ま、り、を、い、ま、ま、に

普光院殿の時、少卿兼訪、先を、捧、ひ、る、上、武
が、年、馬、より、下、り、て、目、を、ま、ま、の、如、く、治、く、ま、ひ
り、普、光、院、殿、を、て、福、何、許、と、云、同、朋、と、ま、ま、で

い、い、む、同、を、ま、ま、を、く、て、相、え、その、治、の、心、ま、く
ら、あ、れ、む、と、云、あ、の、下、の、句、何、と、ま、ま、と、い、ま、ま、
が、年、答、曰、誰、く、治、こ、と、より、ま、く、終、を、め、る、ん、と
云、歌、の、上、の、句、何、と、ま、ま、と、答、ま、ま、と、ま、ま、由、と、ま、ま、
上、る、普、光、院、殿、而、曰、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、
ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、
り、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、
ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、
治、海、一、遊、り、あ、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、

すめいし香おとまゝに原以を子不審なる
者五々決断争ひしよとて人をきひ武蔵原の内
に彼お年机の上よ香を焼き閉して五々云方
重し重しあひてあこのあやまりとゆき一をり
はよしと色くふ修りくまかくは及び改をきげ
涙を流せり云方香をゆとゆて杯をさし又
返させ飲て日以ぬめる謡と一由不原を有てけ
せハ娘控の少謡とうたひたりとぞ云方林感
して寝おき者一倍せし

赤松善光院ぬと教せし時ハ能えて替例の中
入子判教せしとていつ云方の帯せし振指ハ抜ケ
国光と云名物之本河原と云同圃ハ能く日以
新とて死女を及抜ケ出る科とて種あ繼せしを
多りしとて好まお表とて抜ケ由光と云本河原
日蓮宗ハ端地と云る子ハ獄中よりとて

敷山の僧室地坊権原ハ平家能きちの才ハ宝地
坊ハ四ヶ所一学問して大教を兼一源平の形を
知るも坂堀柳ハ返折とてかよとて定分細き

か
け
よ
り

予は其の時好て初とて然らばと出づる三大郡
の私記と著る又其を後とてり今よ一廠山よ
そ坊を今よ一宮他坊と云ざりて

近世の竜山中に平教院殿の父之嘉湖の時産
了よ其書を今用る肩衣す終に竜山の初製
あり其袍の袖とよりその子襪と加わぬ
雪踏かえすり五うて業と加わすり利休を
あつと云傳ふ

本綿踏は今の製法のおくあつた長島山

齊の丹初て製す此の茶の云よ出づる時足
々珍るとして

茶の舎よノ観流と云あり是ハ上系よ板中
として茶の云よ好むものよおとけつる茶の
舎と出ま初め其を妙観と云はよ改めて
ノ観と云一溪が道とこの極端のノの字人の字
傳へんよぬむびと云まとそ宗易がわはこ
香煙の茶の舎とちるりまよ主人屋とをてせ
は長分よ香煙と香合と茶の箱とをて出ま

料理また一き時是と出して待手口の障子と
へたとまゝにこゝに上客香爐のある香く同き
左の袖より懐に入れたきとめは右の袖より出
たきと懐中して次の人へ出せば次の客又
香台の香と泥燈のつきや左の袖より入
て右へ出さるゝ初客の如く束中よ出てたき
て残る一燈と香爐は上客の呈され上客
待手口よなき主人のあはるゝ客を人なれ
まみけ人なれ香台の合よ入るゝ大さ

部から四方厚さ八分半の料理箱もなく又
おとと試んと思は待手口の障子と細めは
てなくその初よりつきて出さる香中りと
つて思は待手口の香を法に香爐も必香爐の
箱と用ゝも那を障子のこいゝるを
と一公持と一

茶やの初きて香炉となき香と短く付は
蓋つおとたぬ法に

屏風の古きより出る中華名物の物を載て

七幅と一廿五方と云々、昭板、淡板、好、一幅有、
上井大炊、一幅有、一是ハ茂古拓ト妙道ト両筆
の和ハ井伊掃部頭ト一幅有、一是ハ定門の手
跡也、油之麩屋ト伝ハ有、一是ハ榎石之
對するより言番ハ早八里の海と強テ釜山海
ト云下友の者是ト云、一海鏡ト云五口弁人、一
ト云、一釜山海より朝鮮の都ト云、一二十日程
ト云、一東萊ト云、一上友の者、一所、
惺窩存ト傳道の中ト云、一少々ト云、一人ハ細川絳中

海那米の曾我丹は中如孫一博和也、一未、
惺窩存生の時、林道書、一圖書、一孫ト求、一坊ト云、
て、一数、一通の書ト以て、一流、一ト云、一た、一家、一子ト入、
さ、一り、一也、一ト云、一孫、一ト云、一子、一ト入、一て、一分、一の、
及、一書、一ハ、一遊、一區の者、一ハ、一関、一津、一海、一波、一ト云、一子、一ト入、一て、一分、一の、
傳、一て、一お、一ト云、一遊、一區、一ト云、一有、一ト云、一も、一傳、一を、一る、一所、
ぬ、一ト云、一む、一こ、一き、一より、一遊、一區、一ト云、一有、一ト云、一も、一傳、一を、一る、一所、
左、一田、一幸、一菴、一ト云、一一、一文、一章、一幸、一は、一綱、一領、一十、一卷、一ト云、一田、
以、一書、一ト云、一者、一傳、一り、一て、一失、一ト云、一て、一孫、一ト云、一子、一ト云、一今、

二いぬ

神祖は法系極簡とあり、船穂度之高野に啓
祐して船穂度と云く、外記隆平抄の首云
孫の万こ

◎日向書明智云佛のうそハ言使と云或土のう
そハ武田と云ハ民百姓ハかよ由き事と名言
大岡依見在陣の時流地四手許あり吾を在
ある人皆阿やしむ大岡云大名在名をど打
は出て留さよのこしはる玉葉と打接ふと

阿才い笑て出せまをアユきしなれハ果して然り此者
たすて少氣味あし思て一友りてゆ前よ
出つ大岡笑て曰はるの遊い而ふつりきやと少
もかよ無むいぬ神と

大つとなく字小系ハ深みたるものまき我
むるりまはるまきむと

舞をと看し女子常盤と云もの人振けハ何カ
も未なり右田之成り島女こと云さむぬ
真西山の孫女さハ歌女と云

作長が事跡を以て今日義元は首領の一人を以て
悔いて取り義元の首と云ふ川原を痛く云ふ
之悔は死して死すに時長は河洲に立死す
て先子より来るお弟とも相見えと皆有る
り」と推する之馬と出して熱田の神前へおむ
しまどりの夢見たる傳ふて通する声云ふ
是武畧之佐大兩のうろよるとことむ輿と扣て
流る者あり」河洲のち悔をたひいて彰盛
のうろよる十年の伝と云ふと一とぞ人皆さる

として推かく義元養子とて榮の去とよる所
急に勢をとり勝利と成りし時義元の勢
足方とせ備は陣と立たりりるより中陣へ
入りぬとせ備えあるとて

河井原合戦の人名今一の肥おち肥後 山丸
進大田 山崎出好肥後 母好肥後 長尾肥後
山口玄蕃肥後 石田園肥後 京肥後 大軍と云て居る
る河見能おちハ事跡を以ての方ちぬハ山口玄蕃と政

落し又少松城をも取て見せぬも敵強して落
し城をとりて引返す圓系の子城をとりて
引返しとて引返すが又思案も未だ法華城と云
はよ人数少のこゝて軍の根子汁ひ給しとて
本城引返しとせし時路二節より少松城に少松
一由より少松の城のときとてさく山傳ひの
少松もさく少松城もさく言ふと山傳ひの
及し傳ひて物事一と云ふ山傳ひて思てま
少松城と傳ひて思はたらかぬと云ふ山傳ひ大

方より感徳く且家の子をれは其の長息子と云
少松城と傳ひて思はたらかぬと云ふ山傳ひ大
をいひよ長息子の長息子と云ふと目録に少松
より江口をたらしめて少松城をたらしめ
少松城と傳ひて思はたらかぬと云ふ山傳ひ大
まると云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
一合と云ふ者七人少松城の七少松と云ふ
明方も少松城の功をたらしめよと云ふと云ふ
と云ふと云ふ

呂母羽はなれおの幕門君へ出され二百石
石原を越えおの家の子よき家御平とて武官の
者も羽幕共の二百石を領せりて居て武附
江口を築き進みよりて河原の上方の武官と云
はる所を多くとりて江口をての上方の武
官と云ハ人よ武官者と云てけ殿の領するは
一石出されりてさるなり取とりて云々もさもか
き作らるらんとして進むるも江口を附家
方よりて成功ると云えなむ我もその領するは

百石と一りたりと云んと思ふに江口の武のこも
又も領するもさるよりよき返答ぞ

お智礼の時ハ東照字ハ御はあはれを信長御殿
お節は命して家康は御とて世よして附て
甚と実ハ先を問とてて害もなす御しとて
東照字を遣はしてお智るる事茶う大内西よか
よりありて附御を紙よりりり御御は御御の御
智る事なすハ東照字を危き事事一ハ
多損信儀もハお智るる事ハ御御は御御の御

の時効効に属せし之を味方の原と平くかり桂
川の海にちよ浅十世とて信長も者とハまッ
流せし云て逃くぞ、人の後ハ大同は増長を
諷せんとん中へうりとして應永一の人位の子
なくして若子なり

丹時方前左衛門家信は成田十九世のとき信一は
武士五七百人と存上て子の代は四百人子
よ女一時代百五十九世の云ハ我ハ一味せん若
誰々五々世の人皆答(む)十九世の云皆人ハ誰

むと信一(中)て河津を誰と

◎成田の水 信重く死後二十斗の間法信と
罵辱せし法信誓て云病氣をく誰ハ礼心の作
あり、河津誰む(き)んをくして平子誰おちま云
以成ち少女の心は色せを逃つきて家子云ハ
法信あし悪くおハ竟くくしめと水耳と
あをよして小赤云云ハ是ハ汝ハ高ハ礼心
ハ誰とこそ法信あれてつそく筑お成の代
子たはせくしと思ハせん若く

この大正が連少
謙信、全盛な玉手と伸信、八ヶ玉手とのぶ佐長、十九玉手大同、天下統一統一して力余り

惺惺、海軍、純伊、吉原、子一、辰と海軍を生於要憲、而死、お安、粟との辰、海軍、純伊、吉原、云、ふ、ハ、家、石田、治、了、と、万、急、一、治、了、存、生、の、中、に、を、げ、ん、て、人、の、非、を、入、し、と、ま、ま、方、の、望、を、入、今、治、了、死、一、其、上、は、所、持、西、能、佐、竹、宮、持、は、海、を、と、ま、ま、是、と、因、り、守、り、ん、で、一、宿、氣、都、て、生、を、望

人の語、少くも、あまを、一、と、云、ひ、し、と、し、と、

明榮、長、吉、ハ、大、岡、の、小、性、を、比、美、が、身、大、岡、或、時、人、を、き、は、よ、く、通、く、上、上、比、日、胃、也、と、好、こ、玉、ハ、ぬ、ぬ、こ、ん、皆、吉、の、特、の、思、と、行、ハ、大、岡、向、玉、ハ、ゆ、が、姉、ハ、妹、あり、や、と、去、を、顔、を、よ、れ、ぬ、こ、

神、多、澤、正、法、名、の、ハ、大、岡、の、時、ト、揚、名、を、是、の、大、名、一、柳、登、和、鉄、唇、ハ、人、指、合、と、云、ハ、る、中、の、外、也、
晋、の、背、襲、ハ、ゆ、り、

高、向、澤、正、法、名、由、也、
越、前、志、士、之、戸、高、山、刑、ア、井、上、也、
吉、見

計と勅一坊と城中とを各洋海まで戸高の
卷初版中と於て新代末中の事と云由也
此より上て云ハ又まても年寄の凡と物と云ハ
版中あるとハ本中と云痛快又武時老中
云一して来る事として英氏困窮としての洋
美ありその由也云先中の唐と米の買金を
のより^る米何と一して云米のなる句と云ハ
誰買金一と云けハ先海井港渡版
買金のよりと云その時諸州云取御成事一

さへハ保津屋の^{後良と呼べ}と云ハ保津屋
かつてはる事と云由也此長言なるりてハ
壬辰月季の日大石河新買一と知る馬の口ハ
限あり是ハ買金を取るとヤ其外於此多し
云つありメ此の人今ハ未す
唐の事と終るをハ古の保津と云者ハ
唐の羽と續く事保津女より起るりと云傳
保津は富子唐の羽と換ひて茶の羽と云て續
て云一と保津は手と云て不富一唐常ハ

將と云きして重しとて出さるる事ありと云はゆ

言兼の書に存心格論と云有

織田信長が片上河内守名高者之傍草園

田長つと云もの大岡(内)を止る可き事

其手折りせしと云る時ハ人世に徳と云る別の

者なれは方抱き付て物しと云と云

おもしろき光院の室長をハ草圃大徳の伊の書

惺翁の伝ふに當時の兵部一の学者に室つて

華首惺達てハおつちとぬと云りて云

六つの中より取らぬ時の人室と指さる人とは

其人かく云ふと云てハ惺翁傳出ある人と云

事と云はて知らぬ

北条の大庄松田尾張の婦子也系新也云

其心と云て大岡の方ハ内應一引入る計と云ハ

二四折田た介同心をよりして社ある處に

入しと云門の者云ふ念を具是徳の中に入て出

て小条の城に入て掃子と告ぐそ日とや大下知

切と年ふ屋張は太身そ持口廣し是は國々
證印を以て已ふぬけらるるが故に大内軍
田如水がこれにて左馬介と稱せしむ相田と稱
せよしと云ふとぬ水すあやむりたる故にて屋張
と稱ふ所とて津を大内如水と書むす津り
うりとしておのり細なりし是れ水一生の指
するにたるが故に如賀太細と云ふ出て云ふを
可成り也此死を

信長は天性吾輩の人にお撲取のら書かす

るは煙草をツ摩賣よりうぬのんぬは太名丸
を多く斃れ一家を亡く家子丸は正智の出家
人は知りなしは太内此は能く成りて成子
か一は此様を武々西子といふ一なるは成子
下されよぬは水の長濱十百石と譲りしん
と云信長大に弄んで其方何とせんと云大つ
云は赤平殿にやたはるゝお玉のここは國に二月
三月のぬに討取はんとしやうささくはとして赤平
と出し竹中半兵衛と云りお將と云はる播磨の言

一 河を遊べし大岡寺家審一 如後九子介も於
しこせ

東照宮の出来軍七ヶ度一 寺塚頼国長淑堀江
阿祚川門鏡也一

小田原軍のそ年東照宮のあつしの時本多
作左衛門とをよむ武土の名を老信長大岡の取三
の老を多し一 平介と名をき老一 林七信堀堀
お 伊波を後

善悪無意の理也一 雜一 細川先不仁一

子孫今も書に池田猪入は長乳母の子を城
介也輩もあそ一 同一 房の育せ一人は老也
白て弓を挽く理を一 如好陣は太閤の黄令を中
板の程一 初也して老を多し教とを以て重也一人
然九子子孫備あは中揚る手と伸一 因情は
春よ手と伸も子孫も之の如く肥後をともし津美
ありし一 なるれも後已は絶り

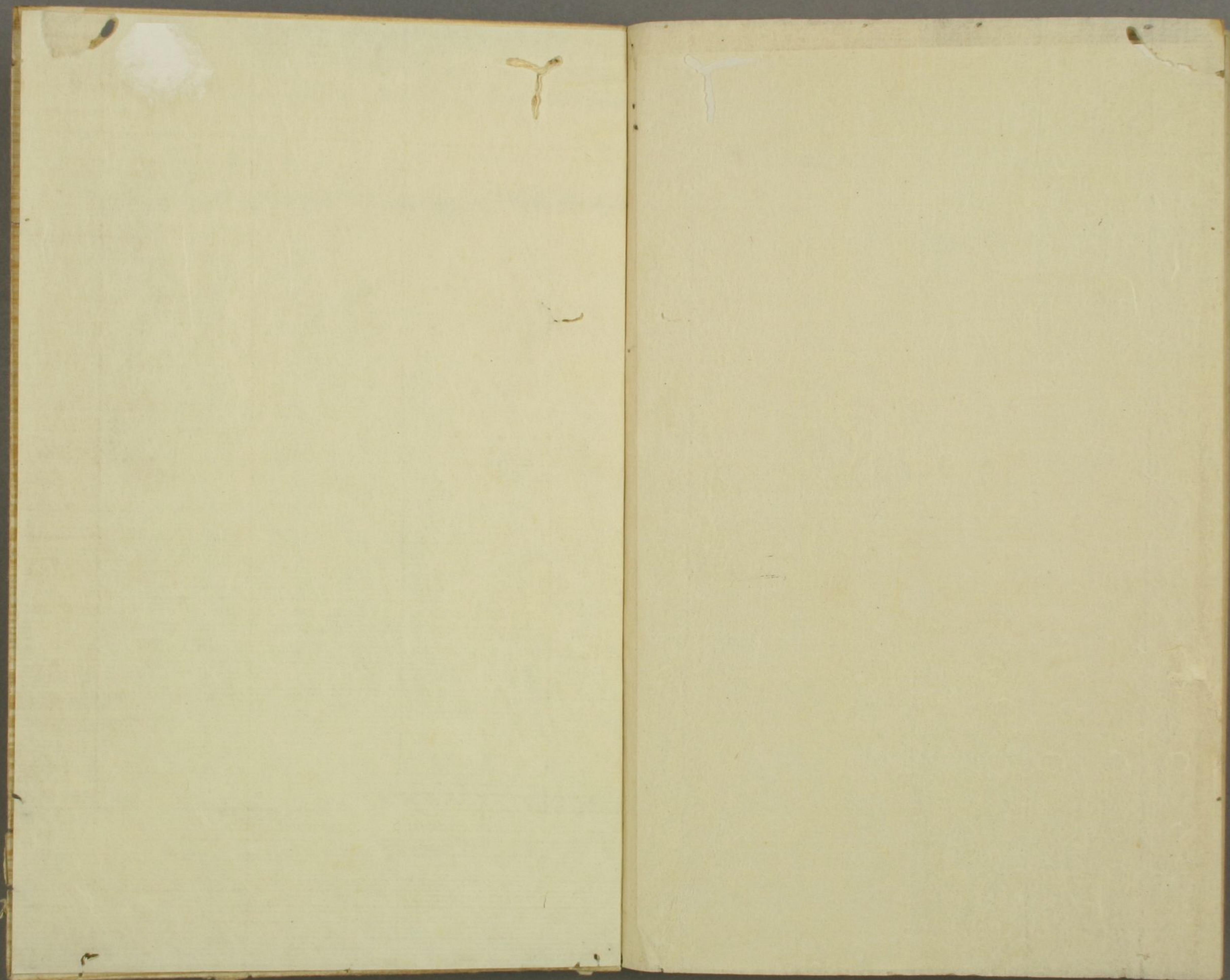
老人雜話一

我外曾祖父專齋存所曾周元事
實難活而執坦庵先生每語即記
之而後藏於篋篋曰老人難活
先生性淳厚諱宗忠坦莽其拜
竇承戊子八月卒年八十六今家
志中自強寫之時年八十五以書以惟
室名所庚定孟秋坂口邵書



邵書





香